

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子……絵画修復家

今日は、連休明けの初日です。私の住んでいる湘南の道路も、やっと渋滞から開放されました。

それにしても、ずいぶん寒い日が続きましたね……。私の部屋から見える海もずっと灰色、風の強い嵐みたいな日もありました。そのときには遠くの茅ヶ崎の烏帽子岩に大きな白い波が立つのまで見えました。それでもこの号が発刊になる時には、きつとさわやかな日差しが戻っているでしょう。

さて、今回と次回では、2回にわたって「紙」にまつわる私の体験談をお話してみようかと思えます。

以前、このコラムに書いたことがあったかもしれませんが、私は、修復家にとって、「紙」は習

熟の必要な、重要な事柄かもしれないと思つています。何だか、これが修復の世界では、「物質」に対する知識の原点のように感じる。でも、それだけにとつてもむつかしい奥の深い世界でもあるようです……。

仕事をする際に、私が最もよく使うのは典具帖という和紙の中でも一番薄いものです。和紙の中で、というより紙の中で最も薄い紙、らしいです。手漉きのものと機械漉きのものがありますが、手漉きは高価なのでうちでは機械漉きのものを使います。この紙は、作品の表面のプロテクションに使うのですが、良質でここまで薄いものはヨーロッパにはありません。私が働いていたルーブルでも、たいがいレーヨンペーパーといってロールになった、典具帖よりは断然厚い、透き通りの少ない物を使っていました。

この、紙の質が違うとどうなるの？と聞かれると、一口に答えるのはちょっとむつかしいのですが、絵具の破片を剥落しないように、繊維の細かさで絵具の表面に食いついている状況がレーヨンペーパーとはやはり違います。レーヨンペーパーは繊維にとつかかりが少ないので、絵具層をはじいてしまう。そしてその分表面に必要となつてくる固着材の量も大目に必要となつてくる。こうした糊の成分は作品に悪い影響を与えます。それに、紙が厚ければ、その分操作性が悪くなるし、絵具



東欧での表打ち。紙は厚く、水分や糊も過剰。絵具層もよく見えない。



典具帖を貼りつけた絵具の剥落部分。糊をつけると、薄い和紙はよく透き通る。

の表面が見えにくい……など、色々不都合が生じるのです。私の場合は、ルーブルをやめて日本に帰ってから、こうした薄い和紙があるのを逆に知つたのですが、日本は紙の文化がやはりすごいなあ、とても感激したのです。

昔、東ドイツ圏だった頃のドレスデンの、ツヴィンガー宮殿の中にある修復研究所を見学した事がありました。その修復の技術はやはりとつても技術的に遅れていたのですが、とりわけ紙を見てビックリ。なんと表面のプロテクションにわら半紙みたいなものを使っていたのです。

こんなのを糊で貼り付けたら水分のせいであとでぎゅーっとちぢまって絵具層を引つ張つて割つてしまう。はりやー、ダイジョウブかなあ、こりや、つて言う顔で私は見ていたのでしょう、その修復家の方が悲しそうな顔をして、私に説明をしました。「東は、物が無くつてこんな紙しか手に入れないのです。……そうよね、だつて、今朝早くに市場で何か買おうと並んだら広場の屋台にはタマネギしかなかったもん。ゼーんぶの屋台がタマネギだった。（だから私の夕飯も一週間タマネギだった。……当時私はホテルではなく、安く泊まれるので学生寮に一人で滞在していたのです。……）わかる。本当になんにも無いよね。で、この人に日本に帰ったら典具帖を送つてあげると約束して100枚をロールにして送つた。

ものすごく感激したと言う旨のお礼状がきたけど、これから先もずっと送る事はちよつと貧乏な私には出来ないし、ある意味焼け石に水だなあという気がした一件でした。

それから、ルーブルでの一件。当時私は天井画を修復していたのだけど、私の師匠がレーヨンペーパーで天井に描いてある油彩画を全面的に表打ち（プロテクション）をして1週間の休暇に入つた。その作業は結構大変。数人掛りで上を向いて紙を広い天井に貼り付けてゆくのはかなりしんどい。で、7日後に来てみると、苦勞して貼つたペーパーは全部パラッとして下に落ちていた。これは、糊が弱かつたせいもあるけれど、もし日本の典具帖だつたなら、表面がかなりつるつるの絵画表面にでもその軽さと繊維の毛羽のためにちやんとくっ付いていただろうと思う。……とにかく、修復には微妙な材料の差が重要なのだ。

私としてはだから日本に帰つてからの方が修復の仕事はやり易く感じている。良質の和紙がいつでも手に入るし、糊を操る桶や濾し器、刷毛も素晴らしいものがある。それにいつだつておいしいものも手に入るしね！（あ、でも数年前にドレスデンに行つたらあの土埃の立つ寂しい屋台の並んでいた場所にはマクドナルドが！建っていました。……）



東欧に滞在中、人々はベルリンの壁を壊しはじめた。私もノミを渡されて参加！ 東から西をのぞきこむ。

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は鎌沼で修復工房を主宰。